

令和 6 年度 奈良女子大学研究推進プロジェクト経費研究報告書

奈良女子大学長 殿

研究代表者

所 属 ・ 職 研究院人文科学系・教授
氏 名 宮路淳子

本年度の交付を受けた研究推進プロジェクト経費について、下記のとおり報告いたします。

申請区分	☒ (A) 多様な人材の協働による研究
	☐ (B) 一般研究
研究課題	人文科学と分析科学による古代の病苦の始まりに関する新知創造学際領域の形成

1. プロジェクトの成果（研究推進プロジェクト経費が交付された期間に、この研究によって得られた新たな知見等の成果を、申請書の「研究目的、研究計画・方法」に対応させて記載すること。また、支出内訳との関係についても記載すること。）

2 ページ以内で記載してください。

本研究の目的は、奈良県内の古代遺跡から出土した有機・無機遺物および付着物等を自然科学的手法で分析し、併せて文献史料ならびに絵巻資料等の解読をすることによって、当時の生活空間を復元しこれまで解明されてこなかった古代日本における病苦の始まりの実態を明らかにすることであった。本研究で対象としたのは、遺跡土壌（動植物遺存体・寄生虫卵を含む）、土器付着物を含む有機・無機物質、土壌鉱物、古墳出土棺および粘土槨、文献史料、仏教美術・思想であった。奈良県内に所在する弥生時代、古墳時代、飛鳥・藤原・奈良時代の遺跡について異分野の研究者の多角的な視点から学際的研究を行った。

本研究では、県内遺跡から出土した遺物および付着物について、有機物については中沢特任教授、無機物については松岡准教授、青木准教授、土器、棺などの考古遺物および土壌中の動物遺存体については宮路、植物遺体および寄生虫卵については金原研究部員、文献史料については村上准教授、仏教美術については佐藤准教授、仏教をめぐる思想については前田准教授がそれぞれ分析を分担した。

1) 土山古墳・狐井稲荷古墳（香芝市）：棺および被覆粘土（粘土槨）

土山古墳は古墳時代前期に構築された前方後円墳である。未盗掘の堅穴式石室は粘土槨を一部検出しているものの、本年度以降に主体部の調査を予定している。狐井稲荷古墳、隣接する狐井城山古墳とともに令和 4 年度より施行されている文化庁による史跡相当遺跡の暫定リスト奈良県第 1 位である。古墳の築造時期は 5 世紀末～6 世紀初頭の古墳時代後期前半と推定されている『古事記』の中で「御陵在片岡之石杯岡也」とあるように、武烈天皇陵がこの古墳ではないかという説がある。申請者らは、昨年度より香芝市と共同研究を開始し、両古墳の主体部の予備調査を進めてきた。本研究では、前方後円墳の主体部（棺および被覆粘土）の土壌分析を行った。また文献史料を併せて解読し 6 世紀に日本に伝来する仏教の影響について考

察した。

2) 富雄丸山古墳（奈良市）：棺および被覆粘土（粘土槨）

富雄丸山古墳は古墳時代前期末～中期初頭に構築された日本最大の円墳である。造り出し部の調査ではみ盗掘の粘土槨が検出され、青銅鏡、蛇行剣など多くの遺物が出土している。申請者らはこれまでに奈良市による調査に協力し、棺および被覆粘土の予備調査に着手している。本研究では同時代の1) 土山古墳との比較を行った。

3) 唐古・鍵遺跡（田原本町）：小型多孔土器および付着した微細物質

唐古・鍵遺跡は弥生時代前期から後期（紀元前3～紀元3世紀）に営まれた、奈良盆地中部に位置する大環濠集落である。本遺跡の形態と遺物の豊富さは、多くの人間が一カ所に集まり長期間の居住を始めたことを示している。大正時代に発見され、本学の前身である奈良女子高等師範学校文科の佐藤小吉教授もその後の調査に関わっていたため、現在も学内に出土資料（土器・石器）を教材として所蔵しており、本学とは所縁の深い遺跡である（宮路編 2024『令和5年度奈良女子大学百周年記念資料室性作業報告』奈良女子大学記念館運営委員会）。発掘調査は現代に至るまで継続して行われており、絵画土器、青銅器生産に用いられる鋳型など貴重な遺物が多数出土し国特別史跡として指定を受けている。本研究では特に小型多孔土器という独特の形態を持ち本遺跡から多数出土している遺物に注目し内外に残存する白色の付着物について、奈良県薬事研究センターとの予備研究を開始した。

4) 纏向遺跡（桜井市）：集落内土坑の土壌水洗・フローテーションによる微細遺物の分析

纏向遺跡は弥生時代末から古墳時代前期（3～4世紀）に営まれた、奈良盆地東南部に位置する大集落遺跡であり国史跡の指定を受けている。最古の前方後円墳とされる箸墓古墳を集落内に含んでおり、古墳時代の始まりのみならずヤマト王権、初期国家の始まりを考えるうえで重要な遺跡である。唐古・鍵遺跡と同様に、遺物の豊富さが多くの人間が集住していたことを示している。これまでに集住が開始されたことによる環境の変化について、予備研究を進めてきた。本研究で遺跡土壌、有機・無機遺物の分析を進め、当時の環境復元を含む生活空間の実態を解明した。

本研究プロジェクトに参画した歴史学コースの学生が、本研究に係る卒業論文を執筆し大学院へ進学したことも大きな成果であった。

2. プロジェクト成果の発表

(論文名, 発表者, 発表雑誌等, 巻・号, 発表年等)

金原正明・宮路淳子2026「土山古墳主体部粘土郭の土壌分析」『土山古墳発掘調査報告書』香芝市教育委員会（印刷中）

宮路淳子2006「古墳墳丘の植生変化」『考古学ジャーナル』820、pp.6-11、ニュー・サイエンス社

村上麻祐子2026「『古事記』『日本書紀』にみえる病認識の変遷」研究プロジェクト報告会、奈良女子大学

3. 支 出 内 訳						
備 品 費		消耗品費	旅 費	謝金等	その他	計
品 名	金 額					
	0円	220,000円 (内訳) ・ 分析用試料	290,000円 (内訳) ・ 国内調査	955,000円 (内訳) ・ アルバイト ・ 謝金	0円	1,465,000 円